

# 『文政雑記』『弘賢随筆』ほか絵図細目

氏家 幹人

本稿は、藤川貞（整斎）が筆録した『文政雑記』『天保雑記』『弘化雑記』『嘉永雑記』『安政雑記』および屋代弘賢『弘賢随筆』の計六本の資料に掲載されているさまざまな絵図の細目である。すでに『北の丸』前号（第三八号）に掲載された『視聴草』の絵図細目と同様、当館所蔵資料の内容検索をより容易にし、あわせて書物の中に隠れた多彩な絵図を紹介する試みに他ならない。

藤川貞は、通称弥次郎右衛門、整斎と号した。上野国沼田藩主土岐家に剣術指南として仕えた藤川近義（一七二七—九八）の孫として、寛政三年（一七九一）に江戸で生れた。祖父近義は、江戸下谷に道場を開き多くの門弟を指導したが、子に恵まれず、河野近徳を養子に迎えた。しかし近徳が若くして逝つたため孫の貞が跡を継いだという。貞は生涯仕官せず、祖父を継承して剣術の師を生業にするかたわら、『出石紀聞』『整斎随筆』ほかの著述をのこし、故実、武具、兵法の研究に勤しんだ。貞の墓は文京区本郷五丁目の喜福寺に現存する。墓石の正面に「整斎藤川貞先生墓」、右側面に「文久二年壬戌閏八月十一日ノ大整院劔光道喝居士 門人立之ノ年七拾得 年」(ノは改行、は判読困難)と刻まれていて、文久二年（一八六二）閏八月に亡くなったことが分かる（したがって享年は七十二歳）。

当館蔵『整斎叢書』第一冊目初めに、安政三年（一八五六）、六六歳の年に詠んだ「夢ならて見ぬ世のことをミつるかな むかし書おく筆のすさ

みを」の一首が記されている。古い記録を大切にすると共に自らもまた後世のために筆まめに現在の事件や見聞を書き残そうとした貞の心構えが感じられる。

『文政雑記』（請求番号一五〇—一四二—全四冊）、『天保雑記』（一五〇—一五〇—五六冊）、『弘化雑記』（一五〇—一五六—一三冊）、『嘉永雑記』（一五〇—一七〇—一〇冊）、『安政雑記』（一五〇—一五八—一六冊）は、明治九年（一八七六）に貞の息子の藤川寛から太政官修史局に献納され、その後同局から内閣文庫に移管された。

屋代弘賢は、通称太郎吉のちに太郎（正しくは「大郎」とも）、輪池と号した。名は弘賢の他に詮虎、詮賢、詮文とも。宝暦八年（一七五八）に幕臣（御家人）屋代忠太夫佳房の子として江戸で生まれ、二三歳の年に父が亡くなり家を継ぎ、天明元年（一七八二）に西丸に出仕。その後は、「持明院流の書をよくして、江戸時代を通じての能書家の一人に数へられる」（森銑三『屋代弘賢』）と評される書道の技と勤勉な性格そして豊かな知識を買われて、『藩翰譜続編』『寛政重修諸家譜』ほか幕府編纂事業の編集員に選ばれ、またロシアや朝鮮通信使に対する外交文書の清書を命じられた。享和元年（一八〇一—四四歳）に五〇俵加増されて禄一〇〇俵、文化元年（一八〇四—四七歳）に勘定格に昇進し、文政七年（一八二四—六七歳）には永々御目見以上の栄誉が授けられた。

天保一二年（一八四一）閏正月一八日没。享年八四歳。弘賢と交際があつた藤川整斎は『天保雑記』第三八冊にその死を、こう記している。「病死。奥御右筆所詰奥御右筆格 屋代太郎 源弘賢後詮丈 法名輪池院大儀詮丈居士 墓所小石川白山権現隣妙清寺世俗薬師寺ト云 当年十月廿九日病死之弘有之、十一月五日朝六半時出棺」。森銑三によれば「弘賢の遺骸は没後竊かに葬られ、その後九箇月余を経て改めて葬儀が営まれたのである」という（前掲書）。

幕臣としての俸禄はわずかだったが、能書家の歌人で国学と故実に精通していた弘賢は数百人の弟子を抱え、とりわけ晩年は収入が多かつたようだ。収入の多くは書物の購入に費やされたと言われ、蔵書家としても著名で、おのずと知識人との交際も広かつた。主だった人物だけでも、弘賢が師事した埴保己一のほか、平田篤胤、曲亭馬琴、大田南畝、近藤正斎、山崎美成、松平定信、あるいは渡辺華山、藤川整斎、等々。弘賢は一九世紀前期の江戸文化人サークルの中心人物だったと言つても過言ではないだろう。編著書多数。なかでも『古今要覧稿』はよく知られているが、同書については本誌次号に絵図細目を掲載する予定なので、ここで紹介は行わない。

『弘賢随筆』（請求番号特九五 四 全六〇冊）については、福井保氏執筆の解題に簡潔に述べられているので、これを抄録させていただこう。「本書は屋代弘賢の手もとにあつた雑稿を取りまとめて六〇冊に編綴したものである。その大部分は毎月十五日、弘賢の知友が会合して、持ち寄りの文章を披露し合つた、三五会の会員たちの草稿から成つてゐる。屋代弘賢一人の執筆ではないが、右のような関係から、この書名を与えたのである」（『内閣文庫未刊史料細目』下・所収）。「三五会」の同人は、弘賢、岩崎常正（一七八六 一八四一 号は灌園。本草学者）、栗原信充（一七

九四 一八七〇 号は柳庵。幕臣で故実家。弘賢の門人）など十数人。このほか山本清任、本山正義、榊原長行、志村知孝らの寄稿が多いが、曲亭馬琴（一七六七 一八四八 滝沢解）と息子の琴嶺（宗伯とも。滝沢興継）、山崎美成（一七九六 一八五六 国学者にして好事家。弘賢の門人）の原稿も含まれている。馬琴と美成は別にそれぞれ兔園会、耽奇会を主催しており、これらのサークルとの交流を知る上でも貴重な資料と言える。

本書の外題は弘賢の自筆ではなく、福井氏は、弘賢の手もとにあつた各人の草稿が、「いつのころか現在の形にまとめられたのであろう」と推定している。明治一二年（一八七九）に内務省購入。その後内閣文庫に移管され、現在に至っている。

#### 【凡例】

絵図資料の番号は、『文政雑記』から『弘賢随筆』まで、それぞれの資料ごとに通し番号とした。

絵図資料の件名は資料の原記述を尊重したが、必要に応じて記述を補い、あるいは新たな件名を作成した。

収録されている絵図が木版等の印刷物である場合は【刊】、彩色を施されている場合は【彩色】、色刷りは【刊・色刷り】と付記した。

『弘賢随筆』に限り、各件の原稿の著者名等が明記されている場合は、「\*岩崎常正」あるいは「\*山本清任 六月一五日」のように、これを付記した。

判読不能の文字は とした。

## 文政雜記

### 【第一冊】

#### 一 メンコル人形

文政一年（一八二八）六月二日、肥前生島に漂着した「モンコルト国」の捕鯨船に乗っていた「メンコル人」（名はアセヒミル。二八歳。身長八寸）の手形。「浮説ナルベシ」とのコメントあり。（『視聽草』初集之六）

#### 二 文政一年（一八二八）、長崎唐人館の清人より久留米水天宮

へ寄進の幟の図

「海土菩薩坐前」とあり。

### 【第二冊】

### 【第三冊】

#### 三 土佐国浦戸沖へ唐船漂着一件

文政六年（一八二三）正月七日、浦戸沖（浦戸村は現在の高知市のうち）に漂着した江南船（乗員一六名）の、船の鱸（船尾）と乗員の図。

#### 四 肥後国辺田村清正公利生仇討

文政二年（一八二九）正月五日、岡崎平左衛門が、「肥後国益城郡下横辺田村」で父の仇嘉平次を討ちとめた。敵討ちの経緯を伝える瓦版の図。

### 【第四冊】

#### 五 崎陽海獣

文政三年（一八三〇）三月九日、長崎港内に現れて鉄砲で撃ち殺され、同二日に屍が浮かび上がった、体長一丈余・胴回り九尺ほどの「海獣」（アシカ）の図。

## 天保雜記

### 【第一冊】

#### 一 四谷大番町にて異産

天保二年（一八三一）八月二五日、四谷大番組辻番横町で、「あつ」という女性（二五歳）が、一ニヶ月目で難産の末、馬のような顔をした男子を出産（三日目に死亡のよし）。「右の子いまた生れ切不申候内、母の中指志本喰切申候由」。父親は捨蔵という馬喰（ばくろつ）で、馬を餓死させた（「ほしころし候」）祟りではないかと噂された。馬に似た赤子の図。もっとも、この図ほどには「異形にてハなし」（これほどには馬に似ていない）という人もいたとか。

### 【第二冊】

#### 二 和州八瀧村地内にて古銅器掘出候儀に付伺書

天保二年（一八三一）一〇月一日、八瀧村（奈良県宇陀市のうち）の畑から掘り出された銅壺、玻璃壺、銅箱の図と銅碑の拓本。銅碑に慶雲四年（七〇七）と刻まれていた。

三 女男犬全図

- ・天保三年（一八三二）正月六日、伊勢崎領連取村（現在の群馬県伊勢崎市のうち）で生れた、六本足で「一牝牝牡」の図。
- ・天保三年一〇月の初め、天徳寺前（現在の港区虎ノ門三丁目）赤井氏宅で出生した六本足の犬の図。

【第三冊】

【第四冊】

七 蝸牛の滑稽

「蝸牛 一名まいないつむり」の図。風刺絵。

図に添えて、「此むし沢瀉の葉より生し金銀をむさほり喰ふ事おびたし 当時角おれて金銀を喰ふ事を得ずしてしつほを出すなり」とあり。

四 会津若松大釜の図

天保二年（一八三一）八月二十五日、江戸町方向心の今泉覚左衛門が、逃亡した罪人を追跡逮捕した帰途、会津若松城下の仕置場（刑場）と「穢多村」の間で目撃し模写した大釜の図。高さ三尺程、直径四尺程で、石川五右衛門の釜ゆでの刑に用いられた大釜（当時の城主蒲生氏郷が秀吉の命で鑄造）の扣（予備）だという。『視聽草』続三集之七

八 阿蘭陀よりヌルテ・ケレナス・シンベ連渡る絵図

天保四年（一八三三）五月一八日にジャガタラを出帆し六月一日に長崎に入港したオランダ船に積まれていた「ヌルテ・ケレナス・シンベ」の図。

五 水野出羽守より伺

天保三年（一八三二）七月、水野出羽守より拝領御紋付・虎皮御鞍覆・自分紋付鞍覆を掛けた馬を牽かせる件について伺が提出された。この件と関連して、「牽馬三疋」の字様を用いた天保四年（一八三三）の「小の月」曆の図が添えられている（大小曆の二種）。

九 南部信濃守より内献上の大砂鉢の図

南部信濃守（盛岡藩主南部利済か）から中野石翁を介して（天保四年に）献上された大砂鉢（長さ三尺七寸五分、幅二尺七寸六分、高さ六寸）の図。入用金三千両余。芝露月町の小道具御用達今津仁兵衛製。東條権蔵（小納戸）によつて立花に用いられる由。

六 天保三年（一八三二）閏一月琉球人登城

琉球使節の図（土岐柳堤画） 村上良斎蔵版。  
七十五翁（屋代）弘賢書。【刊・色刷り】

一〇 松平右近將監領分岩窟之名所 附図

野州都賀郡葛生町の「除地」の山上にある浅間社付近の洞窟内の図（天保四年 一八三三 当時のもの）。『視聽草』十集之三

一一 越中国異病

越中国新川郡若栗村（富山県黒部市のうち）六右衛門から上州高崎（群馬県高崎市）の医者千木良昌哲に宛てた奇病治療の礼状（天保三年 一八三二 九月）の写しと奇病で頭部に角のような物が生えた図。

貫四百文が入っていたという。

【第五冊】

一二 神田橋外二番原辺にて敵討一件の瓦版

天保六年（一八三五）七月一日、神田橋門外二番原（千代田区のうち）の辺で、酒井雅楽頭家来山本三右衛門の娘「りよ」らが、父の敵亀蔵を討ちとめた。敵討ちを報じる瓦版一種。【刊】

【第八冊】

一五 宝暦十庚辰年五月十三日御移替御書院御番所絵図  
宝暦一〇年（一七六〇）五月三日、九代將軍家重が將軍職を退き（新公方は家治）、大御所として二丸に移住。新旧將軍の「移替」に関する図。

【第九冊】

一六 小日向水道町怪談

天保五年（一八三四）四月一日、喜三松・お染の二人が両頭の蛇（猪の頭の池に住みし蛇）のために絶命。フィクシヨ。浄瑠璃「江戸川筋恋の道行」。両断され大蛇と化した両頭の蛇と喜三松・お染を描いた図。【刊】

【第六冊】

一三 潜水機（オランダ名「トイクルスコロツク」）オランダの潜水機の図。

「此品に乗りて水中へ入り候へハ 廿四時八海中に被居候（＝滞ることができる）由二候」と説明されている。また「初渡の由二御座候」とあり、天保五年（一八三四）に初めて渡来した物であることが分かる。

一七 天保仁政丹

薬屋の引き札（薬の効能書）に見立てた風刺の一枚刷り。

一八 小判鮫の図

天保五年（一八三四）六月一日、霊岸島川岸の潮干の砂上で捕獲されたコバンザメ（体長一尺三寸余）の図。

一四 午（天保五年）十二月二十六日付唐津より来紙之写

天保四年（一八三三）三月、肥前松浦郡敵木村（現在の佐賀県唐津市のうち）の田地から掘出された焼物の茶釜の図。釜の中に政和通宝・永樂通宝・開元通宝・洪武通宝ほか古銭二

【第十冊】

一九 阿蘭陀渡り石猪図

天保五年（一八三四）、オランダ船で渡来した、アメリカ産の「石猪」（一名獾）の図。「蛮名」は「ヘンデレキゴロートメイル」。体長三尺余。「此靈獸唐土秦代ニ出タリ 此形ヲ画力キ常ニ見ル人凶夢ヲ不見 疫邪ノ憂ヲ除クト古ヨリ聞伝ニヨリ諸人写シ需メンコトヲ請者夥シ」とある。

【第十一冊】

二〇 仙女香の引札

仙女香は江戸の南伝馬町坂本屋で売り出した白粉（おしろい）。引札は天保六年（一八三五）のもの。【刊】

二二 武蔵国豊島郡雑司が谷村百姓孫右衛門畑にて掘出し鏡一面絵図

天保五年（一八三四）二月六日、護国寺裏門辺の畑から掘出された鏡。裏に鑄付けられた文字は、「天地神明主神同根ノ奉敬写赤城大明神奇蔵靈社ノ誠心成就衆生済渡ノ鑄作之吉次」

二三 感応寺地所絵図

天保五年（一八三四）、平藩主安藤家の下屋敷を収公した跡地に建てられた日蓮宗感応寺の敷地図（天保五年九月一九日のもの）。同寺は、住持日啓（一代將軍家斉の寵愛を受けた「お美代の方」の実父）が天保改革で罰されたため、天保一三年（一八四二）に破却。跡地は、現在の豊島区目白三、四丁目・西池袋二丁目。

二三 金輪寺御成の節献上詩写

天保六年（一八三五）四月、金輪寺（王子権現の別当寺）の権大僧都宥欣が將軍御成りの際に差し上げた詩の包紙の図。

【第十二冊】

二四 天保六乙未（一八三五）略曆 【刊】

二五 乙未大小摺物（天保六年の詩曆）

「天保乙未春正月文軒良貴題併書」とあり。【彩色】

二六 浪花出火の手簡ならびに絵図類

天保六年（一八三五）一〇月の大坂大火の延焼地域図二種。うち「大坂焼場所」は【刊】

【第十三冊】

【第十四冊】

二七 邪法をすゝめ候次第

「男女共心の徳を修し先祖子孫の魂にあておもひしらんす木図」とあり。

【第十五冊】

二八 天保六未大関伊予守辻番所へ手負人倒れ取計

天保六年（一八三五）三月二三日夜、湯島天神下の大関伊予守屋敷の辻番所に、幕臣（評定所書役）宮崎甚助の倅で、勘

当されて乙吉と名乗っていた無宿が負傷して駆け込んできた（傷は実父の宮崎甚助に負わされたものだった）。乙吉の頭上のかすり傷の図ほか。

二九 堀田備中守在所にて釜掘出し

天保七年（一八三六）四月、堀田備中守預所下総国千葉郡寒川村新宿（現在の千葉市のうち）で掘出された古釜の図。高さ七寸五分。釜は千葉常胤が所持していたと言われるが、新田義貞の嫡貞胤の所持品ではないかとの考証が付記されている。また釜は、発掘者である農人（百姓）五郎吉の息子が奉公する江戸桜田久保町の三文字屋に預け置かれたという。

三〇 天保七申江戸中毛降候一件

天保七年（一八三六）六月一九日夜、江戸の各地に獣の毛のような物が降った。天馬の図（『集古漫録』より書写）及び降ってきた獣毛の図。

三一 怪獣の瓦版

天保七年（一八三六）六月二〇日、江戸の谷中に天から舞い降りた怪獣「ふうき（富貴）の図」「我八福き（富貴）をねかふ毛物（獣）なり」と語り姿を消したとか。【刊】

三二 森定次郎敵討の瓦版

天保七年（一八三六）七月一七日、下谷御成道山本町代地で養父の敵討ちが行われた。定次郎は正しくは金七郎か（平出

鏗一郎『敵討』参照。【刊】

【第十六冊】

三三 百文銭通用始の事

天保六年（一八三五）一〇月朔日より百文銭（天保通宝 当百銭、天保銭とも）の通用開始。天保通宝の図（貼付け）。

三四 近藤石見守領分古銭掘出し御届

天保六年（一八三五）九月五日、中奥小姓近藤石見守知行所相模国大住郡沼目村（現在の神奈川県伊勢原市のうち）の百姓忠右衛門が畑から掘出した土瓶に入っていた古銭の図（貼付け）。淳祐通宝。七貫三三〇目。

【第十七冊】

【第十八冊】

【第十九冊】

三五 常州久慈郡増井村正宗寺地古銭入たる瓶掘出たる事

天保七年（一八三六）八月一九日、正宗寺境内から掘出された古銭（重さ三三四貫五九〇目）入りの大瓶と「革サシ」（サシは穴あき銭を刺し貫く細紐）の図。

三六 予州松山にて両頭の小児出産

伊予国松山城下で出生した結合双生児の図（出産は天保七年

一八三六 六月一七日か。

【第二十冊】

【第二十五冊】

下忠右衛門から借りて、天保二年（一八三一） 晩夏（六月）に書写したもの。（『視聽草』三集之十）

【第二十一冊】

四〇 評定所絵図

三七 万国渡来怪物

【第二十六冊】

俣約を忘れさせ破産に至らせる贅沢という怪物「着飾」（キカザリ）の図。洒落で描かれたもの。オランダでは「ユキスギ」「ハデスギ」「ヲゴルキ」と呼ばれるとか。【彩色】

【第二十七冊】

四一 田安の御符

【第二十二冊】

三八 鍋島肥前守水府侯へ御対面の節御詩作ならびに御料理の次第

天保九年（一八三八）三月、水戸殿（徳川斉昭）を鍋島侯（鍋島直正か）が訪れ、経済の事を談じ、詩を応酬。その際に出された料理の図（「汁カケ飯カツヲカケ」「味噌漬香物」「鶏卵吸物」「国産ノ菓子デンチウ 一名五架棒」「塩引酢ヲカク」）。

【第二十三冊】

「家伝田安之御符」の図。「押付養子」の朱印が捺され、次のような「縁起」が添えられている。「抑此御符は無躰山法外寺の越前和尚より數から棒に授けられし靈符なり 一たひ頂く輩は親子兄弟一家中納とく（納得）なくとも田安く（たやすく）破談離別は叶ひませぬ」。越前和尚は水野越前守忠邦を指す。一一代將軍家斉の一一男で徳川（田安）斉匡の養子齊莊が、天保一〇年（一八三九）に尾張徳川家を継いだことを風刺したもの。他に「田安中納言尾州家御相続一件之落首」など。

【第二十四冊】

四二 甲州巨摩郡において米蔵生胆取られ候一件

三九 文政十三寅年京都大地震

文政一三年（一八三〇）七月二日、京都で直下型の大地震。七月二日の地震からその後の余震まで、ゆれの大きさをの大小で示した記録。二条在番の折に大番頭内藤豊後守与力山

天保一〇年（一八三九）二月一〇日、寅年寅月寅日寅時生れの一〇歳の少年米蔵の生胆が「癩病之薬」になるとして切り取られる事件が起きた。米蔵の身体の切開部位を示した図。

【第二十八冊】

【第二十九冊】

四三 京都市中踊

天保一〇年（一八三九）三月中頃より京都市中で踊りが流行。老若男女貴賤の別なく数千人が奇抜な衣装を着けて踊り歩いた。このとき詠まれた狂歌に「京中かゆるくばかりのおどり これや地震の後の世直し」とある。踊る人々の図。四枚のうち一枚。【彩色】

四四 三田魚籃下緑毛の亀図

三田魚籃下善福寺門前代地字豊岡の木工権蔵の庭前に天保一〇年（一八三九）七月二七日に現れた緑毛の亀。「亀甲鮮力ニテ金光見ユ」とあり。

四五 本多上総介家来異獸討捕

天保一〇年（一八三九）九月、岡崎城主本多上総介（忠民）の家来狭間弥一兵衛が岡崎城内で切り捨てた異獸の図。「大サ文程」「尾八猫の如く毛赤く尾長く四足猿二似たる」とあり。

【第三十一冊】

四六 常州笠間藩土某の文通

天保一一年（一八四〇）三月二日、水戸中納言齊昭の東照宮御廟参の際の被り物の図。「モミ烏帽子ニ鉢巻の御姿なり」。同月二日、齊昭は、軍事訓練として千束原（現在の水戸市のうち）で「惣甲冑」の追鳥狩（甲冑を着けた狩）を催した。その際に使用された「歩兵・騎兵」背旗、「弓銃手背旗」の図。

四七 水府よりの来状書抜（「太平の寝気さまし」）

同右の追鳥狩の際の「御組方指物」「御馬印」「諸士指物」の図。本陣以下諸陣配置図。

四八 天保一一年庚子三月二十三日水戸中納言齊昭卿常州千束原において追鳥狩図。

四九 水戸殿（齊昭）東照宮御参詣之行列のうち、「匡国」「啓行」の文字を記した旗の図。半弓と矢の図。金扇御馬印の図。

五〇 松平陸奥守領分小友浦より出航の船漂流一件

天保一〇年（一八三九）十一月一日に小友浦（現・岩手県陸前高田市小友町）から出航した船頭三之丞以下六名は、大風に遭遇して見知らぬ島に漂着。食糧と水を補給して、翌年三月二四日、下総国銚子に無事帰還した。三之丞らが漂着した島（小笠原諸島の父島）の住人（男女）の図。

【第三十冊】

【第三十二冊】

五一 御代替に付御誓詞諸大名家二依て文言違候事

天保八年（一八三七）四月、一一代將軍家齊が將軍職を家慶に譲つたのに伴い、諸大名から將軍への忠誠を確認する誓詞が提出された。出羽国亀田藩主岩城伊予守から提出された誓詞の、「上包」の紙、「蓋に誓詞入と書かれた、桐白木の」上箱、「誓詞と記された」上包の図。  
延享三年（一七四六）正月、出羽国本莊藩主六郷伊賀守から提出された代替誓詞の「上包」、誓詞入れの「桐之箱」の図（前年に八代將軍吉宗から家重に將軍職が譲られたことに伴う誓詞の提出）。  
丹波国柏原藩主織田侯が酒井雅楽頭（老中）宅で誓詞を提出した際の座席図。

【第三十三冊】

【第三十四冊】

五一 大御所逝去

天保一二年（一八四一）正月三〇日、大御所（一一代將軍徳川家齊）没。享年六九歳。院号は文恭院。逝去と葬儀に伴う男女髪型の図。男（幕臣か）女（大奥女中）の髪型の図にそれぞれ以下の記述が添えられている。「黒元結にて根をむすひうしろへ返して油にてへたと付もあり 同しく根を結び内へ折込も有」「女中向は少しく異なるよし 剃髪願の女中七八十人 内三十余人剃髪と云」

五三 大御所没後の鳴物停止の風刺

「鳴物停止円」「止子丸」の引札の図（いずれも薬の広告に見立てて鳴物停止を風刺）。

【第三十五冊】

五四 浄観院様御牌号の事ならびに御贈位の宣旨

浄観院（一二代將軍家慶の室）は、天保一一年（一八四〇）正月二四日に四六歳で没したのち、従二位を贈位された。墓中に埋めた林衡（述斎）謹誌の文章の内、「観」の字の図。

五五 金銀財布記

天保一一年（一八四〇）は一〇、一一、一二月が三ヶ月連続で大の月（ひと月が三〇日）。これを「三大統」といい、冬至の夜九時（午前〇時）に定まった寸法（一尺二寸 五寸五分）と色の財布を縫うと、「永用可得理徳」（この財布を長く用いれば利得を得る）とある。財布の縦横の寸法を記した図。

五六 上総国金谷村漁師長さ二間半の烏賊を得たる事

天保一一年（一八四〇）一〇月二三日、金谷村（現在の千葉県豊富津市のうち）漁師喜三郎が、鰐（サメ）に食い切られて海上に浮かび出た、体長二間半・幅六尺の巨大イカを捕獲した。巨大イカの鳶鳥（ㇿからすとんび）の図。御賄調役岡本仁三郎が差し出した鳶鳥を、天保一二年一月五日に営中（江戸城内）で描いたもので、屋代氏（屋代弘賢）より借り

て写したとある。

【第三十六冊】

【第三十七冊】

五七 落首の看板

「御愛敬之ため御出世被遊呪之古歌左二奉申上候」として、「利くからに秘密の物かたゞひとつ やたら金とぞ御推量あれ」と記し、下に「本家 西下 浜松屋越前大掾」「取次所 桜田 水野屋美濃少掾」「取次所 隅田中野屋石郎」の名を並べた看板の図を載せる。賄賂で出世する幕府の内情を風刺したもの。三人はそれぞれ、水野越前守忠邦、水野美濃守忠篤、中野石翁を指す。

【第三十八冊】

五八 門石橋ならびに砂利等往来の者寄通候者咎候て不苦哉伺（門前の下水に掛かる石橋や砂利の上を通行の武士や町人が通ったとき、これを咎めてもよろしいかという伺い）  
天保二年（一八四二）六月、小人目付へ安藤家より問い合わせ。門と「下水石橋」、砂利の図。

五九 神宮寺蓮池え双頭の蓮生し候事

天保二年（一八四二）六月、神宮寺の蓮池で双頭の蓮の花が開花した（二七日満開）。双頭の蓮花の図。

六〇 丸頭巾・角頭巾に付伺

享和元年（一八〇二）二月二六日、目付松平田宮へ藤堂左近将監家来から頭巾の形状について問い合わせ。付札（回答）に記された丸頭巾・角頭巾の図。

六一 角頭巾・丸頭巾に付伺

天保二年（一八四二）二月二日、「赤見」から徒目付山内与四郎への問い合わせに対する回答別紙の雛形（角頭巾・丸頭巾・惣十郎頭巾の図）。

【第三十九冊】

【第四十冊】

六二 長崎町年寄高島四郎太夫炮術一件

高島四郎太夫（秋帆 一七九八 一八六六）は長崎の人。オランダ人から西洋砲術を学び、天保二年（一八四二）、幕府の命で、徳丸原で洋式砲術の演習を行った。  
高島四郎太夫門人および長崎奉行田口加賀守家来市川熊門人の武装図。

六三 落首品々

・「本所林町肥後屋林右衛門」の「丑四月十六日より 呉服夏物大安売」の引札（広告）の図。丑（天保二年）四月一六日、林肥後守忠英が若年寄から「菊之間縁頼詰」に更迭。このことを風刺したもの。

・三番叟の図。林忠英（若年寄）・水野忠篤（側衆）・美濃部茂育（小納戸頭）の失脚を風刺したもの。【彩色】

【第四十三冊】

六五 於吹上砲術上覽の事

天保一二年（一八四一）八月二五日、江戸城吹上元馬場において砲術の上覽。三捷流鉄砲の標的（か）の図。

【第四十一冊】

六四 三方領地替え一件

天保一一年（一八四〇）一月、幕府は川越・庄内・長岡三藩に領地替え（三方領地替）を命じたが、庄内藩の領民は藩主酒井家の長岡転封阻止の大運動を繰り広げ、翌年七月、幕府はついに領地替えを撤回した。

六六 武術上覽姓名

天保一三年（一八四二）五月七日、御白書院落縁において武術上覽。武術上覽場の図。

・領民が用いた「巻反木綿之幟」の図（「庄一意いなり大明神」の文字が記されている）。

六七 於五十三間奥向堅物上覽射手姓名

天保一二年（一八四一）一〇月一七日、五十三間において弓術堅物（兜や鎧のような堅物を射抜く試技）の上覽。当日用いられた鎧（胴）の図。

・結集した領民が、大浜（酒田）の米置場に立てた「遠見印」と「白青赤三色之木綿吹抜」の図。前者には「山神」、後者には「正一居なり大名神」と記されている。

【第四十四冊】

六八 小出伊勢守屋敷跡三芝居え被下候事

・領民の大集会で立てられた高札や各種の旗と幟の図。高札には以下の箇条が記されている。「一畑作物猥二踏ぢらし申間敷事 一積置候かや勿論下草至まで焚申間敷事 一御役人中え対シ雑言過言申間敷事 一何事二よらす私二喧嘩口論仕間敷事 一酒田通行之節くわいさせ火繩松明等堅無用之事」

・「藤島外六社頭二川南惣百姓群集之図」。上藤島村（現在の山形県鶴岡市のうち）の六所神社における領地替え反対の大集会の図。

天保一二年（一八四一）、幕府は浅草山之宿町の小出伊勢守（丹波園部藩主）の下屋敷一万一五〇〇坪を収公。跡地に堺町・葺屋町・木挽町の歌舞伎三座を移転させるよう命じた。三座の移転先は猿若町と命名され、芝居小屋は天保一三年から翌一四年にかけて移転した。上地となった（収公された）小出伊勢守下屋敷の敷地と、同屋敷地の替地（雑司ヶ谷感応寺跡地のうち）の図。

【第四十二冊】

【第四十五冊】

六九 御小性組差物寸法

御小性組の差物（指物）の図。差物掛りの大目付岡村丹後守に問い合わせて取り寄せた雛形である旨、天保一三年（一八四二）八月四日の朝比奈三郎兵衛の記がある。

【第四十六冊】

七〇 駿河国阿部郡白氣相立候届

天保一四年（一八四三）二月、駿河国阿部郡大願寺境内から毎日黄昏になると白氣（白色の雲気）が觀察された。代官池田岩之丞からの届。徳願寺山（静岡市）にかかる白氣の図。  
（『視聽草』続七集之七）

【第四十七冊】

七一 天保十四年卯の春水戸様御居間に平日御掛物

蓑と笠をつけ鍬で耕す百姓の後姿を描き、次の和歌が添えられている。「難有や雨の降る日と蓑と笠 錦にまさる事なわすれそ」

七二 水府公御触書ならびに自葬式文

水戸藩天保改革の一環として布達された「自葬之式」に添えられた位牌と墓の図（および寸法等）。自葬は僧侶や神官に依頼しないで行う葬儀。

七三 天保十一年水戸におめて水府公追鳥狩の節御備立

天保一一年（一八四〇）、水戸で軍事演習のための追鳥狩が催された。（四六）  
狩で使用された各種幟・旗・差物・馬印・纏・陣羽織・母衣・袖印の図。狩場の陣立ての図。【彩色】

七四 安心洞の図

水戸藩主徳川斉昭が考案した、牛に牽かせる戦車。安神車（水戸東照宮に現存）。

【第四十八冊】

七五 西丸御普請に付高掛上納金一件

天保九年（一八三八）三月一〇日、江戸城西丸炎上につき、幕府は諸大名に再建の手伝いを、万石以下（百俵以上）に上納金を命じた。上納金の関係書類（帳面）の図。表紙に「高掛上納金取計方御差図之廉々認取御書付」と記されている。

七六 南無阿弥陀仏と彫られた石碑の図

西丸再建に際して、敷地の土を「清き土」に入れ替えようと御殿山から土が運ばれたが、作業中に「南無阿弥陀仏」と彫られた永享一一年（一四三九）の碑が掘り出され、忌まわしいとして作業は中止された。

七七 金気急命丸の引札

「類焼御免」と角書された「金気急命丸」という薬の広告に

見立てて、西丸再建手伝いや上納金を命じた幕府を皮肉ったもの。「調合所」は「遠州浜松越前大掾」（水野越前守忠邦）で、その効能を「此薬一帖相服候得は驕の虫ぐつ音も出ず困窮いたし 家中物成借米出来 百姓用金子を売り女房を売食いたし候様に食気つき申候」とある。

【第四十九冊】

【第五十冊】

七八 呂宋国漂流記

天保二年（一八四二）九月、奥州荒浜（現在の宮城県亘理町のうち）を出航した観吉丸（乗員八名）は、九十九里浜沖で漂流。翌年七月にフィリピン群島の小島に達し、マニラ、香港、マカオ等を経て天保一四年（一八四三）二月に長崎に帰還した。『呂宋国漂流記』は、弘化二年（一八四五）、大槻清崇（磐溪）編。呂宋（フィリピン）の漂着地や「マネラ城」（マニラ）の位置を示す略地図。蒸気船の図。

【第五十一冊】

【第五十二冊】

【第五十三冊】

七九 落首数多

幕政幕閣（水野忠邦ほか）風刺の数々。

・「詰世欲関の扉 沢瀉大夫直伝」（弘化二年 一八四五）板元「高島屋四郎兵衛」。

・「前代末明阿房鏡 浜松水之介相勤申候」の辻番付（弘化二年）。

・「新法上知丸」の引札（天保一四年 一八四三）。天保一四年に幕府が出した上知令を、薬の効能を記した引札に仕立てて風刺。

・菓子屋（浜松屋越前大掾）の引札。

天保一四年（一八四三）閏九月、老中水野忠邦の解任を風刺。「日本一よいきびだんご」「町家なんぢうせけんの人よいころ餅」等の菓子の名が見える。

・青山に出した飯屋の看板の図（「越前めし」「菜物品々」と書かれた看板の図）。

・改正不重宝年代記（天保一四年 一八四三 開板）

【第五十四冊】

【第五十五冊】

八〇 神奈川青木町本覚寺山より出土品の図

天保一五年（一八四四）八月二四日、神奈川青木町（現在の横浜市のうち）本覚寺山で山崩れがあり、穴の中から骨、奥歯、土器、勾玉が発見された。

【第五十六冊】

八一 長崎湊異船固絵図

天保一五年（一八四四）、日本に開国を勧告するオランダ国王の書簡を携えた特使の船が長崎に来航。幕府は勧告に従う意志がない旨を回答した。長崎湊異船固絵図（オランダ特使の船が来航した長崎港内の様子）。

図。

八二 国王書簡長崎奉行請取の図

八三 モルモツの図

天保一五年（一八四四）一月に長崎屋源右衛門方で「御払（入札売り払い）になったオランダ船持ち渡りの「モルモツ」（テンジクネズミ）の図。「惣大キサ大成チン（狛か）位 毛色鹿の毛より黒みあり 鳴声いまた聞す 食物青物類八何にても吉 殊の外勢ひのあるもの」とあり。

弘化雜記

【第一冊】

一 南品川宿の内唐もろこし実鶏の頭形変化せし事

武州荏原郡南品川宿（現在の品川区のうち）地内の久兵衛はシャモを飼い、蹴合させて負けたシャモを絞め殺して売っていた。その後シャモを飼うのは止めたが、「蹴合場所」に植えたトウモロコシにシャモの頭の形をした実が成った。弘化二年（一八四五）七月八日にスケッチされたトウモロコシの

【第二冊】

二 川口宿竹の葉鳳凰の形に生じたる事

武州足立郡川口宿（現在の埼玉県川口市のうち）の鍛冶屋新兵衛の家の裏の笹敷に生えた奇竹（葉が鳳凰の形に茂っている）の図。弘化二年（一八四五）五月二〇日にスケッチされたもの。

三 一夜の内他領え山移候事

子（文政一一年 一八二八）三月二十八日、伊豆国田方郡田代村（現在の静岡県修善寺町のうち）に山が隆起したことを示す図。小堀織部の知行所の山が川を挟んだ本多修理の知行所に移動（陥没と隆起）。『視聽草』二集之十

四 水泳上覧烈名

「弘化二年（一八四五）七月一八日水泳上覧所絵図」。大川（隅田川下流）の佐賀町と田安家下屋敷の間の水域で行われ、將軍は御座船上覧。

五 渋川六蔵武蔵野草と申書を認候事

渋川六蔵（名は敬直。一八一五 五一）は天文家で曆算家。書物奉行を兼務し水野忠邦に重用された。六蔵が天保一四年（一八四三）二月に著した「武蔵野草」で構想されている文武稽古所の図（炮術・弓術・馬術・鎗術・

銃術の稽古場と学問所及び鉄砲場、的場、馬建場、馬場。

九 亜墨利加船図

アメリカ捕鯨船マンハッタン号の図。【一部朱】

六 鳥居甲斐守ほか仕置一件落首の事

鳥居甲斐守（通称は耀蔵。名は忠耀。一七九六—一八七三）は林大学頭述斎の三男で、水野忠邦に重用されて町奉行を務めた。弘化元年（一八四四）に罷免され、翌年、讃岐丸亀藩に永預となった。

【第四冊】

【第五冊】

一〇 異国船の図

四月七日から八日にかけて対馬沖を通行した異国船の図（嘉永元年—一八四八）。【彩色】

【第六冊】

【第七冊】

一一 団十郎が事

八代目市川団十郎の自害の場面と血染めの手形を捺した遺書の図。八代目団十郎は天保三年（一八三二）に一〇歳で団十郎を襲名した人気歌舞伎役者。嘉永七年（一八五四）八月六日、大坂の旅宿で謎の自害を遂げた。享年三二歳。死後、三〇〇種余りの「死絵」（追悼の錦絵）が出回ったが、これもその一つ。【刊・色刷り】

【第三冊】

七 南亜墨利加人物・北亜墨利加人物

弘化二年（一八四五）三月、アメリカの捕鯨船マンハッタン号が日本の漂流民（阿波国幸宝丸乗員）を乗せて浦賀に入港した。

マンハッタン号の乗員のうち南アメリカ人の楫（舵）取り（名はヘルレルス）と北アメリカ人の水夫の肖像。【彩色】

八 船主・上按針役

マンハッタン号の船主（名はメルケトルコフル）と上按針役（上級航海士か）（名はウイレルムポースト）の肖像。【彩色】

一二 天徳寺地中にて頭骨掘出す事

弘化二年（一八四五）三月二日、西久保の天徳寺栄寿院（現在の港区虎ノ門三丁目のうち）の庭で井戸を掘っていたところ出土した頭骨の図。武州多摩郡和泉村の某が秘蔵する

天狗の頭骨と似ていると、見物人が集まったよし。

【第八冊】

一三 日交暈説ならびに図

弘化三年（一八四六）五月一〇日に現れた日交暈の図。日暈（ひがさ）は雲気（赤みを帯びた白色の光）が環状に太陽を取り巻く現象。

一四 月賁宿の大星

弘化三年（一八四六）五月二日に見られた「月賁宿の大星」の図。

一五 文政度日暈図説

文政五年（一八二二）正月二日に見られた日暈の図。

一六 日輪三つ見へたる事

弘化三年（一八四六）五月二日朝、京都で日の出の際に日輪（太陽）が三つ見えた。その図。

一七 尾州雷鳴強大氷降る事

弘化三年（一八四六）正月、諸輪村・和合村（現在の愛知県日進市、東郷町のうち）に降った大雹、氷柱の図。この雹に当って百姓二人が即死、手足や頭に負傷した人は「幾千人とも数相分不申候」とある。

【第九冊】

一八 亜墨利加船の図

弘化三年（一八四六）閏五月二七日、アメリカ東インド艦隊司令長官ビッドル（「ビツテレ」）が、コロンブス号・ピンセント号を率いて浦賀に来航。通商を求める書簡を浦賀奉行に渡した。浦賀に来航したアメリカ船の図。【彩色】

一九 阿部駿河守陣所より江戸役人への用状・附同領の名主よりの申立

弘化三年（一八四六）閏五月二九日、八幡村与五右衛門が異国船（ビッドルのアメリカ船）の様子を報告した届に添えられた、大筒・鉄炮鎗・テンマ（伝馬船 本船に搭載された小船）の図。

二〇 異船の様子

各種旗の図。【一部朱】

【第十冊】

【第十一冊】

二一 長崎奉行申上フランス渡来差出御書付

弘化三年（一八四六）六月七日、フランスインドシナ艦隊司令官セシルが、三艘の軍艦で（琉球を経由して）長崎に来航。フランス船が遭難した際にこれを救護するよう求める文書を長崎奉行に提出した。セシルが提出した漢訳の要望書

に捺された印と署名。

【第十二冊】

【第十三冊】

二二二 信州大地震

弘化四年（一八四七）三月二十四日、長野県北部を震源とする大地震（推定マグニチュード七・四）が善光寺領一帯を襲った。「善光寺地震」と呼ばれるこの地震で善光寺町はほぼ壊滅し、また岩倉山の崩落によって犀川がせき止められて湖が生れた（四月一三日にせき止めた箇所が決壊し、洪水が下流の村々を襲った）。犀川がせき止められ湖となった様子を描いた図。

【第二冊】

三 阿蘭陀風説書

エレキテルの図。このエレキテルは医療器具で、全身の血行を促し、中気等の療養に効果があるという。「血脈之滞ニて身体不自由成者ニ此針金の末ニ有之候処ノ手ヲ両手ニて握らせ（下略）」とある。

嘉永雜記

【第一冊】

一 日輪暈南方に顯

出羽国由利郡矢島（現在の秋田県由利本荘市のうち）表からもたらされた手紙より。嘉永元年（一八四八）四月二五日の昼過ぎ観察された青赤色の日輪暈の図。「当朝霜降 昼前雖快晴寒き方 空中白氣厚シ」とある。

五 怪獣

アヘン戦争の概要を平易に記した嶺田楓江著『海外新話』（嘉永二年 一八四九 刊）に「出青田県怪獣事」（青田県の山中に出現した怪獣の事）として描かれている怪獣の図の写し。怪獣は二層の頭（眼は計五つ）の上から青い煙を出し、

二 人面蜘蛛

嘉永二年（一八四九）、麻布十番の浪人森田某が農夫から手

その煙に触れた人は日を経ずして絶命するという。

【第三冊】

【第九冊】

九 慢気胆の引札

阿部伊勢守正弘を諷したもの。(『安政雑記』第七冊)

「第一胃腎を養ひ躰情増するといへとも、腹の痛なし 権威を増々強くなり 腹は肥脾胃氣を引入れて邪魔を払ひ 酒宴娯楽ほしいまゝになす(下略)」とある。

【第四冊】

六 異船乗廻りの湊絵図

嘉永二年(一八四九)閏四月、イギリスの軍艦マリナー号が浦賀、下田に来航し港内を測量した。マリナー号の沿岸における航跡を、江川太郎左衛門、大久保加賀守ほかの届(報告書)等によって示した図。

安政雑記

【第五冊】

【第一冊】

一 アメリカ船が測量用に建てた白木綿の旗の略図

嘉永七年(一八五四)二月三日、「羽根田生麦大師河原辺之海岸沖合共即(測)量」「大師河原生麦之沖合海岸二目印之旗ヲ建 都合三ヶ所二建候 巨細二即量いたし候事」とある。

【第六冊】

七 遊女安売引札

新吉原角町の妓楼「万字屋茂吉」が出した「現金引手なし 遊女大安売」の広告ビラの図。「此度商内之仕法替仕 茶屋客一切請不申 現金売正札付直段引下ケ(下略)」とある。

【第七冊】

二 金銀貨幣(ドル)略図  
それぞれの重量を付記。

【第八冊】

八 台場普請の絵図面

嘉永七年(一八五四)、内海警衛(江戸湾内の軍備)のため品川沖に造成された二一の台場の図。【彩色】

【第二冊】

三 蘭字翻訳

嘉永二年(一八四九)二月十八日、隠岐島に上陸した異国船の乗務員が、紙に書いた文字の図。

【第三冊】

四 講武所規則覚書

講武所は、幕末に設けられた幕府の武芸修練所。安政三年（一八五六）に定められた同所の規則覚書に見える、修行希望者の申請書（「名前書」）書式。

【第四冊】

五 安政七年（一八六〇）陰曆陽曆対照表

【第五冊】

六 両頭の鳥

安政四年（一八五七）に加賀国白山に現れた両頭のカラスの図。われは熊野権現の使いで、わが姿を朝夕見るときは死の難儀を逃れると語ったという。

七 彗星略測之記

安政五年（一八五八）八月一三日に彗星が見えた。その観測報告に記された、彗星の位置を示す図。

【第六冊】

八 地震散の引札

安政二年（一八五五）一〇月二日の江戸地震の後に流布した落書。地震を振出し薬（「地震散」）にたとえ、「職人土方は

冷腹をあたゝめ身上の痛みを治する」とその効能を記し、地震後の土木建築業界の活況を述べる。

九 慢気胆の引札

安政四年（一八五七）の風刺一枚刷りの写しか。「伊勢」とあるのは、備後福山藩主で幕府老中を務め安政四年に没した阿部伊勢守正弘を指す。（『嘉永雑記』第一〇冊）

一〇 西洋曲棒足並手前七変化・其物真似徒士男組

芝居の絵入番付に見立てた風刺。銃を天秤棒がわりにした男の図。

一一 嘉門散の引札

嘉門散（三國無双邪氣払 嘉門散）は、一名「井伊妙薬」。効能書に「第一世を直し天下の跡目を整へ」とある。また「取次所」として、「掛川屋備後郎」「越前屋鯖江」の名を挙げている。「井伊」は安政五年（一八五八）に大老に就任した井伊直弼。「掛川屋」は同年に老中となった前掛川藩主太田資始。「越前屋」は太田と同時に老中となった鯖江藩主間部詮勝を指す。井伊直弼政権を薬に喩えて風刺した一枚刷りの写し。

一二 東権現の関

おみくじに見立てて二代將軍徳川家慶の治世の吉凶と対処法を記したもの。「征夷不征夷」「水隠乱政事」「取立者不忠」

等と記し、「第十二代目大凶」とある。

【第八冊】

【第九冊】

【第十冊】

【第十一冊】

【第十二冊】

【第十三冊】

一三 有村次左衛門兼清の鎗印

安政七年（一八六〇）三月三日、桜田門外で大老井伊直弼襲撃に加わった薩摩藩の有村次左衛門は、井伊の首級をあげたのち、重傷を負い、若年寄遠藤但馬守胤統の辻番所の付近で自害を遂げた（享年二三歳）。その死骸見分書に記された鎗印の図。

一四 鯉淵要人・山口辰之介所持品

桜田門外の変で井伊直弼を襲撃殺害したのち、重傷を負い、八代洲河岸織田兵部少輔の辻番の近くで自害した者（鯉淵要人か山口辰之介のいずれか）の懐中にあつた「水府新製三軍通宝」の図。

【第十四冊】

【第十五冊】

【第十六冊】

一五 清国軍・英仏軍攻防の図

一八五八（安政五年）六月、英仏連合軍が天津に侵入し条約の締結を迫った。そのときの紅毛船（英仏軍艦）と沿岸の砲台の図。

弘賢隨筆

【第一冊】

【第二冊】

【第三冊】

一金棒（松虫） \* 橋本常彦

「今町中にて用ゆる金棒二種有 一種ハ錫杖のことく輪有て鳴也 今一種ハ此図のことくに地をするのミ也 此音リンタタと鳴也、よつて松虫といふよし」とある。

二中黒紋 \* 栗原信充

源（栗原）信充の家紋考証中に見える図。

【第四冊】

三 帯の図 \* 橋本常彦

『和漢三才図会』より。「常彦云 帯を平張（ひらはり）と訓せしこと笑に絶す 平張八棧敷のこと也 幕のことにあらす」とある。

九 九姑課 \* 山崎美成 文政八年（一八二五）

雑占の一種。その方法と吉凶の相の図。その方法は、草の茎九本を二つに曲げて握り、願いを祈ってから息を吹きかけて二本ずつ結いつけ、最後の二本を結わずに残し、左右に引いたとき出る相で吉凶を判断する。

四 小石川御薬園中船繫松古跡図 \* 岩崎常正 【彩色】

五角を生やした馬 \* 榊原長行

「文政五年（一八二二）三月 津軽公留守居河合何某より借写」。津軽領内の三歳馬の右耳に長さ一寸程の角が生えた図。

【第九冊】

一〇 櫛・托子盤 \* 中島勝美

『三才図会』を引用し、「今のちやたい（茶台）の類也」と考証。

【第五冊】

六 大坂城内の地藏形石灯籠 \* 岩崎常正

大坂城内にある地藏形の石灯籠。元禄頃の物のよし。

一一 茶人頓齋の伝 \* 延語

早見頓齋は小堀遠州に茶の湯を学び、大徳寺江雲和尚から「明三」の名を授けられた。江雲和尚が頓齋に授けた「明三」の墨跡とそれを収めた箱書付の図。

【第六冊】

七 ハリネツミ \* 岩崎常正

【第十冊】

一二 三方（宝）大荒神像 \* 三輪正賢

『山海経』より三面人の図。「今世に三宝大荒神といふ神像八いつの頃より祀りはじめしや未詳 たゞしその像のかたち山海経にのする所三面人と趣相似たる上（下略）」とある。

【第七冊】

【第八冊】

八 白楊

武州八王子では「ヤマナラシ」と呼ぶ。

一三 トクヒレ \* 榊原長行

トクヒレは西海にいる魚の名。希有な魚で容易に獲れないが、この魚を見ると開運疑いなしと言われている。日頃その図をながめているだけでも開運をもたらすとて、ある人が長行に贈ったトクヒレの図。

【第十三冊】

一八 矮女

越後出身の二四歳で身長二尺の女性の図。  
「食事など八三、四歳の小児の如しといふ 煙草を好む」とある。【彩色】

一四 火車 \* 山本清任

下総国長巢村の庄屋又左衛門の下男喜介が、文政六年（一八一三）三月に火車になると言つて姿を消したのち、又左衛門の庭にあつた火除け札の図。火車は妖怪の一種。

【第十四冊】

【第十五冊】

一九 本朝医談二編（奈須恒徳著）

名医三喜の像。下総国古河城下一向寺に安置されている三喜の坐像の図。

一五 らふ竹 \* 山本清任

大塚辺に住む大八木俊庵という医師の抱屋敷の藪中の珍竹の図。赤黒色の斑があることから鼈甲竹とも。「近頃此竹殊の外ふへたるゆへ切て売出すよし らふ竹に用て甚麗し」とある。「らふ竹」は羅宇竹で、煙管の管に用いる竹のこと。

【第十六冊】

二〇 はかあらひ（墓洗い）

文政一三年（一八一〇）、江戸を含め関東一円で、正体不明の何者かが墓石などを磨く石塔磨きの怪奇現象が見られた。妖怪「はかあらひ」の図。

【第十一冊】

一六 積名

榊若の図。

【第十七冊】

【第十二冊】

一七 駿河町越後屋替紋合印の事

三井越後屋の提灯や暖簾等に付ける印の図。

【第十八冊】

二一 葵楓蕩（あおいかつら） \* 屋代弘賢

葵楓蕩の図。「アフヒカツラノカツラハ加茂祭ノ日ニ冠ニモツケ簾ナトニモカクルモノナリ」とある。

『兔園小説』第二集

【第十九冊】

二二 かめのこどつづき（亀の子胴突）

亀は陸上で穴を掘って産卵したのち、穴を埋め、腹で土を固める。その様子。

二三 しりくめ縄（注連縄）の図

二四 おたふく \* 志村知孝

旧家伝来の一軸に描かれた「お福の方」の図。お福の方は家康に仕えた女性。「此御姿のある家は食物とほしき事なし」と主人が語ったよし。【彩色】

二五 妙法国益春略図 \* 本山正義 文政一三年閏三月十五日

相州三浦の住吉吉右衛門が文政一一年（一八二八）頃考案した曰。南町奉行所で販売を許可。本所松坂町の粉屋信濃屋に置かれていたものを写した図。

二六 井 \* 志村知孝

「井」は魚の餌にされる虫の名。羽田の弁天に参詣の際に漁師の籠に入っているのを見たという。「蚯蚓（ミミズ）に似て肥大也」「海中泥沙の中に生して諸魚食せざるものなし」とある。

二七 魚の図

「文政十二己丑年三月江戸漁人此魚ヲ生ニテ持来ル 方言詳

ナラズ」「形ヤガラ魚ノ如シ」とある。【彩色】

二八 蟻 \* 岩崎常正

蟻が卵を運ぶ図。蟻は他の巣から卵を奪って自分たちの巣穴に運び食料とする。

【第二十冊】

二九 鯨の図

三〇 海獺 \* 岡田忠貞

文政六年（一八二三）二月五日、肥前唐津唐房浦の漁師が神集島（現在の佐賀県唐津市の内）沖から引いて来た海獣の図。海獺はアシカ。

【第二十一冊】

三一 神交魚（カレイ）と比目魚（ヒラメ）の図  
左がカレイで右がヒラメ。

三二 蘓若蘭織錦回文の詩

その図と読法。

三三 反問

行幸反問作法図。反問は天子の出御などの際に邪気払いのため足で地面を踏みしめる陰陽師の呪術。

【第二十二冊】

三四 古狸の筆蹟

一一〇歳の狸が書いたという「竹」の字。

【第二十三冊】

三五 水虎図説

水虎（河童）の図二三種。

【第二十四冊】

【第二十五冊】

三六 さゆり \*岩崎常正

南部方言で「さゆり」と呼ばれる植物の図。葉は百合に似て花は淡紅色。「按るにこれ古いふ所のさゆりなるへし 百合の中の花早きものなり」とある。

三七 先頃尾州より伊勢路へふりたる実のやふなるもの三品 \*岩崎常正

庭に植えたところ赤小豆のような実からは名の知れざるものが生え、あとの二つは蕎麦と樫の実生と判明。  
鉢に樫の図。

三八 阿蘭陀灯籠の図 \*岩崎常正

【第二十六冊】

三九 天茄児 \*栗原信充

中国明代の『八詩画譜』に見える天茄児の図。丁子茄（ちようじなす）、鍼茄（はりなす）は、白牽牛または天茄児と同じ物という本草家の説を紹介。

四〇 穿胸国 \*栗原信充

『山海経』より同国人の図。胸に穴があいている。

四一 名体不離 \*栗原信充

南無阿弥陀仏、阿弥陀仏の字で書いた阿弥陀仏の文字絵。

四二 福良爵（ふくらすずめ） \*栗原信充

ふくらすずめ（脹雀）の紋の図。

四三 重良愚筆 \*栗原信充

古河の同志で書画を好む枚田文右から贈られた五柳先生（陶淵明）の図に捺されていた「重良愚筆」の印影。

四四 石州肖像 \*栗原信充

大和国小泉藩主で茶道石州流の開祖片桐石州（一六〇五—一六七〇）の肖像。三名は貞昌の肖像。

四五 保田遠江守義定朝臣肖像 \*栗原信充

平安・鎌倉前期の武将安田義定（一一三四—一二四四）の肖像。

【彩色】

四六 いかもの作

元服の際に用いる「芋ノタカモリ」の図。

【第二十七冊】

四七 福祿寿 寿老人 \* 屋代弘賢

「長頭八寿老人にて 長頭ならさるは福祿寿とおもはるゝ也」とある。

・ 邢和璞（唐の人で黄帝と老子の学を好んだ）の図。

・ 福神の図（『三教搜神大全』）。

・ 宋画福祿寿（須賀川駅長祿禪寺蔵）の略図。 【彩色】

・ 会津の土屋七郎が長府の某家で模写した図。

【第二十八冊】

【第二十九冊】

四八 和琴の事 \* 栗原信充 七月一五日

和琴の六弦の図。

四九 河内大明神

河内大明神は、上野国利根郡師村（現在の群馬県みなかみ町のうち）の三峰山の神。神体は不明だが、この山に参詣して犬を借りて帰ると盗難に遭わないという。三峰山の図。

五〇 ①（内に、虫篇にソの字） \* 橋本常彦

元祿の頃から世俗にこれを発句に詠み給えと持ち歩くことが行われている。芭蕉は「月と風はたかにしたる相撲かな」と詠んだとか。

五一 津軽笛 \* 岩崎常正

江戸で流行の笛の図。「奇なる笛」で小児が吹く。その音が「ひやぶん」と聞こえるので「ひやぶん」とも言つ。また津軽の方から来たので「つがるふえ」とも。本所の鍛冶屋が作つて売り出した。一説に、元来は満州の楽器だとか。

五二 筆クサ \* 岩崎常正

和名ハママギ、コウボウムキ。奥州の海浜や相州七里ヶ浜などの砂地に多くみられる植物。

五三 糝 \* 岩崎常正

和名ウノアシ、エゾビエ 糝子の図。

【第三〇冊】

五四 生持吉詞中要

案山子と扉付きの鏡の図。

【第三一冊】

五五 両頭蛇 \* 海棠庵録 文政八年（一八二五）二月八日

文政七年（一八二四）一月二四日夕七時頃（午後四時頃）、

深川六間堀町清兵衛店源兵衛の召使卯之助が、一ノ橋から二〇間ほど東方の川の土を浚った際に引き上げられた「両頭之蛇」の図。長さは三尺ほど。数原清庵が一覧して写したものの。蛇は筒井伊賀守（政憲）に差し出されたという。『兔園小説』第二集。

五六 風流祭

「つくし（筑紫）の道のしりの国」で、収穫後に行われる風流（里神楽の類）の図。西原晁樹画。【彩色】

五七 佐久山自然石 \* 海棠庵 文政八年（一八二五）一月

「野州那須郡佐久山常川出現天然石仏像搨本摸」。野州佐久山中町（現在の栃木県大田原市のうち）の住人住吉屋為八が、文政八年四月、鯉の魚溜の石垣を作るため近くの常川から取り寄せた石の中に、仏像の姿が。大田原城下の日蓮宗勝法寺の住持に見せたところ、「祖師上人」のお姿に違いないと述べたとか。領主福原家の家臣原某から海棠庵に贈られた話題の石の拓本の写し。

【第三十二冊】

【第三十三冊】

【第三十四冊】

五八 秀吉公陣釜 \* 志村知孝 六月一日

南蛮鉄の釜（直径一尺五寸余）。越前国様木峠深見弥右衛門所持。

五九 人魂のごとき物 \* 橋本常彦 八月一日

八月一日の八時半時（午前三時頃）、東から西へ光を発しながら飛んだ人魂のような物の図。【彩色】

六〇 唐国の瓦 \* 本山正義 九月一日

練堀小路御徒組屋敷の土中より出た瓦。

六一 銅笛 \* 三輪正賢 四月一日

大河内茂左衛門政朝が朝鮮から持ち帰った物のよし。

六二 閻王手印 \* 大河戸儀成 四月一日

相州藤沢遊行寺の什物。【彩色】

【第三十五冊】

六三 大和国添下郡古畑村異鳥を捕し話 \* 栗原信充 一〇月一日

大形の蝙蝠のような異鳥の図。剣術指南の正田与三郎の稽古場に飛び込んだ、四本足で大きき二尺余の鳥。

六四 あるかほつし \* 岩崎常正

十手の中に種子島（鉄砲）を仕掛けた物。

六五 三足の蟾蜍（ヒキガエル）の図

文政二年（一八二九） 月五日に灌園（岩崎常正）の庭で  
産まれた三足の蟾蜍の図。【彩色】

ル図（九四）

六六 静女舞衣模様 \* 本山正義 一〇月一五日

日光道中総州中田駅（現在の茨城県古河市のうち）岩松山光  
了寺の什物で、紺地に模様縫。

【第三十八冊】

七二 オランダキセル（南蛮煙管の異名）の図。古歌に詠まれた「お  
もひ草」。【彩色】

六七 ハマ弓（破魔弓） \* 坦齋 丑月一五日

ハマ弓遊図。ハマはハマ弓の的。藁で拵えた讃岐円座状の物。  
ハマ弓は投げられたハマを射て競う正月の子供の遊び。

【第三十九冊】

七三 椽（木篇に永） \* 岩崎常正  
サクの葉（実物を貼付）

【第三十六冊】『西羌北狄牧場菜穀考』所収の図 \* 滝沢解

六八 東牆

七四 シヤウロイモ（ジャガタライモ・エゾイモ・オランダイモ・馬  
鈴薯） \* 岩崎常正

六九 蒨 ■

陸英蒨 ■ の図。和名は俗に「にわとこ草」。稻生若水和名  
「わくす」。

花と根塊の図。

七五 無食子 \* 岩崎常正 三月一五日

屋代弘賢の庭のハハソ（柞）の木に生じた無食子の図。親指  
大の塊。図には「中二虫ヲ生シテ樹肉虫ノタメニ腫起スルモ  
ノ也」という説明が添えられている。

七〇 苜蓿

苜蓿の葉・苜蓿の花

七六 「ナラガウ」の図 \* 岩崎常正

「勃落（ナラ）樹ノ根上ニ生スル栗毬ノヤウナルモノ」「実  
ニ非ス又無食子ニモ非ス」とある。

七一 われから

われから（海藻の間に住むワレカラ科の節足動物）の図。貝  
の「われから」の図。「佐州ノ産ナルモノヲ顕微鏡ニテ視タ

七七 弘法大師御影の漬物石 \* 岩崎常正

漬物の押石にするために本芝四丁目浜手海磯際で拾ってきた石に、弘法大師の姿のような模様を発見（文政六年二月）。その図。「右石黒色 目口薄墨色 鼻は矢張黒色御座候」とある。

七八 ブナの木 \* 岩崎常正

ブナの実の図。

【第四十冊】

七九 兔園小説 \* 乾斎主人（中井豊民）

京都安井門跡の宝物のうち、羅生門へ渡辺綱が持参した禁札の図。

【第四十一冊】

八〇 白猪の図 \* 志村知孝

【彩色】

八一 志賀の都の古瓦 本山正義 戌八月一五日

その撮本（拓本）。

八二 蛙（ドブガイ） あゆめる図 \* 志村知孝

二、三年前に農夫から得たカラスガイを庭の池に入れて置いたところ、去月中旬に池の中を歩く姿を見たという。「口を下にして舌の出し方へあゆめり」とある。【彩色】

【第四十二冊】

【第四十三冊】

【第四十四冊】

八三 越前鞍考附録辻家鞍鐙

辻政也、東城それぞれ作の鞍の断面図。辻家伝統系図。花押（朝倉政元・天方通綱・朝倉元能・辻政貞・辻政也・政直・政長）。

【第四十五冊】

八四 肉蓯蓉の図

肉蓯蓉は高山に生える薬草の名。高さ一尺二、三寸。根の太さ四寸、長さ二寸余とあり。

八五 蛇怪 \* 鈴木分左衛門（鈴木椿亭）

蛇コシキの図。一五匹の蛇がとぐろを巻いたところと真中にあった銭貨（景元祐宝）の図。文政九年（一八二六）六月二五日、小石川三百坂の高橋百助の倅千吉（一四歳）が、近所の牛袋何某の門の辺りで一五匹の蛇が折重なつた中に古銭があるのを発見。手を差し入れて古銭を取った。図は、千吉が描いたもの。とぐろの高さは一尺六、七寸で、横幅は一尺六分だったという。

八六 へひこしき(蛇こしき) \* 山本庄右衛門

蛇がとぐるを巻いている様と景元祐宝の図。八五と同じ件。

八七 肥後国連理木図

肥後熊本城外ウルゲ村(宇留毛村 現・熊本市のうち)にある連理の松の図。

八八 清正伝記抄

幕の紋、家の紋等の図。

八九 算番死難所

ソロバンの図(松平外記事件の風刺)。文政六年(一八一三)四月、江戸城西丸で、書院番士の松平外記が同僚五人を殺傷する事件が発生した。算番死難所は、「そろばんしなんしょ」と読むのか。

【第四十六冊】

九〇 湯島天神別当去冬取入れし古鈴の図 \* 山本清任 二月一五日

九一 御本松 \* 志村知孝

九鬼大隅守屋敷の板垣内にある松の図。五本松ではなく御本松。三代將軍(徳川家光)が鷹狩の折にこの松を見て、「是本の松なり」と言ったことから「御本松」の名が付いたとか。

九二 晴雨計 \* 岩崎常正

「スボンギース」(海綿)を用いた西洋の晴雨計の図。「スボンギース」が「天曇り雲気を催す時八忽湿り重くなり晴る時八乾き軽くなる」ことを応用。

九三 秩父山第一の松 \* 志村知孝

秩父山領内松王山の高さ三六間の名木。

九四 われから \* 岩崎常正

「南部方言われからと呼ものあり 一種の水虫なり」(七一)。

【彩色】

九五 河州岡村百姓九右衛門裏庭に生出し珍草 \* 橋本常彦 三月一五日

河内国岡村は現在の大阪府藤井寺市のうち。安永頃の図入りの書付を貼付。

九六 窓梅 \* 本山正義 三月一五日

窓梅は花弁ごとに穴がある梅のこと。器の模様として描かれた窓梅の図。『正賢随筆』中の窓梅の図。

【第四十七冊】

九七 「有気無気解」(源峰雄すなわち成島衡山の著。卜占関係の書)

より。河図と洛書。

「理と数との源八河図洛書より出たり」とあり。

九八 納音五行図

九九 有氣無氣巴図

【第四十八冊】

一〇〇 鞅鞅（満州）・カラフト・エトロフほか地図

【第四十九冊】

【第五十冊】

一〇一 山之宿念仏塚

浅草山之宿の小出家下屋敷にある念仏塚、塚の碑（嘉暦三年  
一三二八 刻）の図。碑に彫られた南無阿弥陀仏それぞれの  
文字の模写。

【第五十一冊】

【第五十二冊】

一〇二 再室八島考評

「室の八島」は現在の栃木県栃木市内にある和歌の名所。大  
神社社境内にある八つの人工の小島の総称で、それぞれに浅  
間神社の小祠がある。一帯の絵図。井上信好図。

【第五十三冊】

一〇三 火中水運の器 \* 岩崎常正

「桶のたが二ツを上下に用 木綿或ハ麻布にてもよし 松脂  
壹斤二油二合程入 煮てよく煉 右の布へぬり用ゆ 尤たが  
へ布をとちて松脂をぬり水を運ぶに甚軽く 不用之時八たゝ  
三置なり」とあり。

一〇四 南化和尚 \* 榊原長行 七月一六日

臨濟宗妙心寺派のうち南化派の開祖となった南化玄興（一五  
三八 一六〇四）の印影（玄興）。

「信長公甲州をうち平らけ恵林寺まで打よせられ焼討の時  
山門より飛下り三百余人の内にて 南化和尚只一人存命なり」  
とあり。

一〇五 鮒魚 \* 志村知孝

近所の池島幸助の庭の池で釣れた魚だと何某が持って来たの  
を写した図。「琉球金魚のこと」とある。【彩色】

一〇六 祐天大僧正の真蹟（南無阿弥陀仏）の模写および同大僧正の袈

裟の錦 \* 本山正義 七月一五日

祐天大僧正（一六三七 一七一八）は、五代將軍徳川綱吉と  
その母桂昌院の帰依を受けた浄土宗の僧。増上寺の住持など  
を務めた。

一〇七 ソクセキ ランヒキ \*三輪正賢 五月一五日

「ランヒキ」は蘭引(らんびき)で、酒、香料、葉種などを蒸留する器具。「ソクセキ」は即席か。

「右図の如く茶碗茶台にて湯煎にかけ煎し心見けるにランヒキにて取如く湯気茶台へ流溜る 依て図するのミ」とある。

【第五十四冊】

一〇八 タカメ(田亀) \*志村知孝

その雌雄の図。「池沢にありて魚をとり喰う故に魚ハサミと  
もいへり」とあり。

一〇九 釣針

相州房州沖の海でマグロ・カツオ等の大魚を釣る際に用いる  
釣針(擬餌針)の図。

一一〇 鎌倉御造宮の節在勤の人より贈られた瓦の写図

文政一年(一八二八)に鎌倉鶴岡八幡宮ほかを再建修復。

鹿山(円覚寺)・千葉屋敷・和田義盛屋敷・足利屋敷・鶴力

岡・北条屋敷・親王屋敷・政子御所等の古瓦の図。

一一一 建久年中双子の兄弟養父敵討の次第(瓦版)

一二二 鋤 \*三輪正賢 一月一五日

「松平大和守え紀五郎殿御引移に付紀五郎殿え御讓に相成候  
御道具鋤」

【第五十五冊】

一一三 うつろ舟の蛭女

享和三年(一八〇三)二月二日、常陸国の「はらやどり」

という浜の沖を漂流していた奇妙な船と、船中にいた異国の  
婦人の図。浦人たちが浜辺に引き寄せてよく見たところ、船

体は丸くて長さ三間余(五メートル半)、上はガラス障子で  
中が透けて見え、船底には鉄板がはられていた。中の女性は

「蛭女」とおぼしく言葉が通じない。役所に届けると事が面  
倒になり費用もかかるので、もとのように沖へ出して押し流

したという。【彩色】

一一四 品革(品川)の巨女 \*琴嶺(滝沢興継)宗伯 文政八年

(一八二五) 一〇月三日

その手形(原寸大か)の図。何某が琴嶺の父馬琴に贈った手  
形を模写したもの。「品川の巨女(おおんな)」とは、品

川宿の鶴屋が抱えていた飯盛女「つた」のこと。駿河出身で  
大女であったが「品形見苦しからず 夜毎に通ふ嫖客多かり」

とあり。文化四年(一八〇七)四月頃から評判になったとか。

【第五十六冊】

一一五 防己(ぼうき)アオツトラ

青葛(あおつづら)は植物名。その図。【彩色】

【第五十七冊】

一一六 高松半平墓 \* 本山正義 戌六月一五日

高松半平（一六一八年没）は豊臣の家臣。下板橋宿慧照院智清寺にある同人墓の図及び墓碑の拓本。

一一七 丸山権太左衛門 \* 坦齋 戌九月一五日

権太左衛門（相撲取り）の肖像。「僕幼少の時 此丸山か事 老母の話にて聞及へり 釈迦か嶽より少し先輩にて 当世にかくれなき大力と聞り」とある。

【第五十八冊】

一一八 劉禹錫像

劉禹錫は唐代の詩人で進士。『呂祖全書』所載の図。

一一九 伊達綱村朝臣絵事 \* 栗原信充 巳三月一五日

伊達綱村（一六五九 一七一九）は仙台藩主。その自筆の肖像の抄写。

【第五十九冊】

一二〇 こむの図

「こむ」は笛の一種。「唐山人程致遠所画文姫帰漢図」より。

【第六十冊】

一二一 提婆虫図 \* 山本清任 六月一五日

図に添えて「其形蛇ニ似テ尾ニ長毛三糸アリ三尺ニ近シ 即

于蘭山先生所謂俗称馬尾蜂ト是ナリ」の解説あり。

一二二 靈龜の甲羅に彫られた文字のようなもの \* 岩崎常正 一〇月一五日

文政一〇年（一八二七）四月、佐渡沖で漁師の網に掛かった靈龜の甲羅の「文字」の図。

一二三 くたべ \* 三輪正賢 一〇月一五日

越中立山に出現した「くたべ」の図。今年から四、五年のうちに悪疫が流行して多くの人の命が奪われるが、一度でもこの絵を見た人は病を免れるだろうと（くたべ自らが）語ったという。

一二四 胎内にやと（宿）りて三ヶ月目に（出か）産したる子の図。

\* 三輪正賢 戌一月 【彩色】

（公文書専門官）